

A Researching Hiroshi Kawasaki through
Japanese Language Teaching Materials “Wani
no Ojisan no Takaramono”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-12-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大塚, 浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00028487

小学校国語教科書教材基盤研究

——「わにのおじいさんのたからもの」の考察を通して——

A Researching Hiroshi Kawasaki through Japanese Language
Teaching Materials “Wani no Ojiisan no Takaramono”

大塚 浩¹
Hiroshi OHTSUKA

（令和3年11月30日受理）

ABSTRACT

Hiroshi Kawasaki (1930-2004) was born in Tokyo of Japan. The first recorded example of his work “Wani no Ojiisan no Takaramono” ran in 1976 edition of Publishers by Fujinnotomosya. Later, in 1976, he had his first work, “Wani no Ojiisan no Takaramono” officially published. A fuller, revised version “Wani no Ojiisan no Takaramono” was included. The main issues examined in the research of Hiroshi Kawasaki, were the historical backdrop that the story was set against; the differences between the characters in the original version of “Wani no Ojiisan no Takaramono” and those in the school textbook version. The textbook version of “Wani no Ojiisan no Takaramono” was published by Kyouiku Publication and Gakko Publication in 1989. It was selected for the first time as a teaching material for students aged 8 years or older and aged 10 years or older. Since 1989.

はじめに

川崎洋は、1930(昭和5)年1月26日、東京府荏原郡大井町原（現・東京都品川区西大井）5345番地に、父・甲平、母・てるの長男として生まれている。母方の祖父により、詩経の「河水洋洋」に因み、「洋（ひろし）」と名付けられた。1946(昭和21)年、父の紹介で詩人丸山豊と出会い、同人詩誌「母音」に参加する。1953(昭和28)年、茨城のり子と共に同人雑誌「權」を創刊する。「海に就いて」がラジオ九州から放送され、これ以降詩劇や放送台本の執筆も手掛けている。1970(昭和45)年、ラジオドラマ「ジャンボ・アフリカ」の脚本を手掛ける。翌1971(昭和46)年、放送作家として初めて芸術選奨文部大臣賞を受賞する。1975(昭和50)年頃から方言に興味を持

¹ 国語教育系列

ち始め、全国各地に取材に出かけるようになる。1979(昭和 54 年)、童話集『ぼうしをかぶったオニの子』(絵・飯野和好)を、あかね書房から出版する。翌 1980(昭和 55)年、第二回旺文社児童文学賞を受章する。1986(昭和 61)年、詩集「ビスケットの空カン」を刊行する。翌 1987(昭和 62)年に第 17 回高見順賞を受賞する。1997(平成 9)年、紫綬褒章を受章する。1998(平成 10)年、第 36 回藤村記念歴程賞を受賞する。詩集としては、「はくちょう」「木の考え方」「川崎洋詩集」「海を思わないとき」「重いつばさ」「目覚める寸前」等を、童話・絵本としては、「まじょっこトロンチ」「おじいさんのえ」「なみをばけつにくんだらば」「あいさつの本」等を、評論・随筆・エッセイ集としては、「あとが記」「詩の生まれるとき」「方言の息づかい」「言葉あそびたがり」等の数多くの作品を残している。2004(平成 16)年 10 月 21 日、74 歳にて永眠している。

小学校国語教科書教材としての「わにのおじいさんのたからもの」は、1989(平成元)年版の教育出版(小学校 2 年下)並びに学校図書(小学校 4 年上)を緒として、以後掲載され続けた。しかしながら、2002(平成 14)年度版では、教育出版並びに学校図書において「わにのおじいさんのたからもの」は姿を消す。これは、学校五日制の完全実施による学習内容の削減の影響を受けた国語教科書教材編成によるものであった。2005(平成 17)年版では、教育出版並びに学校図書において再掲載され、加えて大阪書籍(小学校 2 年下)においても掲載されている。

そこで本稿では、「小学校国語教科書教材基盤研究」の一環として、川崎洋の作品「わにのおじいさんのたからもの」の考究を通し、初出テキストと初刊本テキストの比較、おにの子の帽子について、おにの子の人物像について、考察を進めていくものとする。

1. 初出テキストと初刊本テキストの比較

「わにのおじいさんのたからもの」は、1976(昭和 51)年 2 月 1 日発行の「婦人之友」に短編連載された作品「ワニのおじいさんの宝物」(絵・和田誠)が初出テキストである。その後、1979(昭和 54)年 7 月 31 日にあかね書房から出版された『あかね創作童話 6 ぼうしをかぶったオニの子』収録の「ワニのおじいさんのたからもの」が初刊本テキストとなる。

(1) 「白い花」から「ホオノキの大きなはっぱ」への改変

初出テキストである「婦人之友」掲載の「ワニのおじいさんの宝物」では、川岸の水際で横たるわにに対し、おにの子が何度か声かけをして安否確認をする場面を、次のように記している。1)

やっぱりワニはぴくりとも動きません。

死んだんだ、と、おにの子は思いました。

鬼の子は、そのあたりの野山を歩いて、白い花を帽子につんでは、ワニのところに運び、からだのまわりに積み上げていきました。

朝だったのが午になり、やがて夕方近くなって、ワニのからだは、半分ほど、シラウメ、ユキヤナギ、スイセン、ウスユキソウなどで埋まりました。

すると、「ああ、いいにおいだ」と、ワニはつぶやきながら目をあけたのです。

「きみかい、この白い花を、こんなにたくさんかけてくれたのは」

「ぼくはあなたが、じっとして動かないから死んでおいでかと思ったのです」

「遠いところから、長い長い旅をしてきたものだから、すっかり疲れてしまっね、もうこ

こまでくれば安心だと思ったら、きゅうに眠くなってしまってさ。ずい分、なん時間も眠っていたらしいな。夢を九つもみたんだから」

一方で、初刊本テキストである『あかね創作童話6 ぼうしをかぶったオニの子』収載の「ワニのおじいさんのたからもの」では、同じく川岸の水際で横たわるわにに對し、おにの子が何度か声かけをして安否確認をする場面を、次のように記している。2)

やっぱりワニはぴくりともうごききません。

しんだんだ——と、オニの子はおもいました。

オニの子は、そのあたりの野山をあるいて、じめんにおちているホオノキの大きなはっぱをつんでは、ワニのところにはこび、からだのまわりにつみあげていきました。

朝だったのが昼になり、やがて夕がたちかくなって、ワニのからだははんぶんほどホオノキのはっぱでうまりました。すると、

「ああ、いい気もちだ。」と、ワニはつぶやきながら、目をあけたのです。

「きみかい、はっぱをこんなにたくさんかけてくれたのは。」

「ぼくは、あなたがじっとしてうごかないから、しんでおいでかとおもったのです。」

「とおいところから、ながいながいたびをしてきたものだから、すっかりつかれてしまってね、もうこまでくればあんしんだとおもったら、きゅうにねむくなってしまってさ。ずいぶんなんじかんもねむっていたらしいな。ゆめを九つも見たんだから。」

初出テキスト「ワニのおじいさんの宝物」におけるおにの子は、「そのあたりの野山を歩いて、白い花を帽子につんでは、ワニのところへ運び、からだのまわりにつみあげていきました。」として、「白い花」を帽子につんでわにの所に運んでいる。これに對し、初刊本テキスト「ワニのおじいさんのたからもの」におけるおにの子は、「そのあたりの野山をあるいて、じめんにおちているホオノキの大きなはっぱをつんでは、ワニのところにはこび、からだのまわりにつみあげていきました。」として、「ホオノキの大きなはっぱ」をつんでわにの所に運んでいる。

では何故、初出テキストの「白い花」から初刊本テキストの「ホオノキの大きなはっぱ」への改変が行われたのであろうか。初出テキストの「白い花」は、祭壇やお墓に供え、死者を弔うために用いられることが少なくない。おにの子は、「ワニのおじいさん」、「ワニのおばあさん」と呼び掛けても「ぴくりとも動」かないわにの姿を前にし、恐らく「死んだんだ」と推測して「白い花」を帽子につんではわにの体の周りに積み上げ続ける。おにの子は、横たわるわにに對する弔いの行動を起こしたと見て取ることができる。

初出テキストの「白い花」から初刊本テキストの「ホオノキの大きなはっぱ」への改変には、二つの理由が存在すると考える。すなわち、一つ目は、「シラウメ、ユキヤナギ、スイセン、ウスユキソウ」の四種類の白い花における開花時期の相違、二つ目は、初刊本テキスト「ワニのおじいさんのたからもの」から新たに加筆・挿入された文章表現と作品中の季節感の統一がそれである。

おにの子が集めた白い花は、「シラウメ、ユキヤナギ、スイセン、ウスユキソウなど」である。これらの開花時期を比較すると、白梅は二月～三月に、雪柳は三月～四月に、水仙は十一月～三月に、薄雪草は四月～七月に、それぞれ開花となる。おにの子が集めた「シラウメ、ユキヤナギ、スイセン、ウスユキソウ」の四種類の白い花には、開花時期の相違が認められる。白梅・雪柳・水仙の三種は、開花時期を春先に重ねることが可能であるが、キク科である薄雪草は夏草であり、開花時期が異なる。薄雪草は、高山に多くの植生が認められる小さな草である。薄

雪草は、茎・葉に白い綿毛があり、夏期に茎の上にある星形の葉上に群生させて小さな白い花を咲かせる。おにの子が集めた「シラウメ、ユキヤナギ、スイセン、ウスユキソウ」の四種類の白い花における開花時期の相違が、テキスト改変の一つ目の理由と考えられる。

改変の二つ目の理由としては、初刊本テキスト「ワニのおじいさんのたからもの」から新たに加筆・挿入された文章表現と作品中の季節感の統一を挙げることができる。初刊本テキストには、作品の冒頭部において「へびもカエルも土の中にもぐりました。カラスがさむそうにないています。」という文章が新たに加筆・挿入されている。初刊本テキストの冒頭に加筆・挿入された文章表現から、おにの子が作品中に登場する季節は、「晩秋から初冬」であると推測することができる。初刊本テキストの「ホオノキ」は、モクレン科の落葉高木で、山地に自生する木であり、大形で楕円形の葉を持つ。おにの子が作品中に登場する「晩秋から初冬」の時期の「ホオノキ」は、野山に大形で楕円形の葉を落葉させており、文章表現と作品中の季節感の一貫性も保持できる。

初刊本テキストの冒頭に加筆・挿入された新たな文章表現である「へびもカエルも土の中にもぐりました。カラスがさむそうにないています。」と、初出テキストの「白い花」から初刊本テキストの「ホオノキの大きなはっぱ」への改変により、作品中の季節感の統一と一貫性が図られたと考えることができよう。

(2) わにのおじいさんの「なんだって？」の改変

初出テキストである「婦人之友」掲載の「ワニのおじいさんの宝物」では、わにのおじいさんが宝物を知らないおにの子の姿に驚く場面を、次のように記している。3)

鬼の子は、宝物というものがどんなものなのだから知りません。宝物というコトバさえ知りません。

とんと昔のそのまた昔、桃太郎が鬼から宝物をそっくり持って行ってしまったからというものは、鬼は宝物とはぜんぜん、えんがないのです。

「なんだって？きみは宝物というものを知らないのかい？」

ワニのおじいさんは、驚いて、すっとんきょうな声を出しました。そして、しばらく、まじまじと鬼の子の顔をみていましたが、やがてそのシワシワクチャクチャの顔でニコッとしました。

一方で、初刊本テキストである『あかね創作童話6 ぼうしをかぶったオニの子』収録の「ワニのおじいさんのたからもの」では、同じくわにのおじいさんが宝物を知らないおにの子の姿に驚く場面を、次のように記している。4)

オニの子は、たからものというものがどんなものなのだから知りません。たからものということばさえしりません。

とんとむかしのそのまたむかし、ももたろうがオニからたからものをそっくりもって行ってしまったからというものは、オニはたからものとはぜんぜん、えんがないのです。

「きみはたからものというものをしらないのかい？」

ワニのおじいさんは、おどろいてすっとんきょうなこえをだしました。

そして、しばらくまじまじとオニの子のかおを見ていましたが、やがて、そのしわしわくちやくちやのかおで、にこっとしました。

初出テキスト「ワニのおじいさんの宝物」におけるわにのおじいさんは、「なんだって？きみ

は宝物というものを知らないのかい？」と、宝物という言葉に無反応なおにの子に驚いている。しかしながら、初刊本テキスト「ワニのおじいさんおたからもの」におけるわにのおじいさんの言葉は、「きみはたからものというものをしらないのかい？」と改変されている。初出テキストに存在した「なんだって？」が、初刊本テキストでは削除されているのである。

初出テキストに存在した「なんだって？」の削除については、異論を唱えたい。なぜならば、初出テキストの「なんだって？」は、宝物というものがどんなものなのかを知らないおにの子に対するわにのおじいさんの驚嘆を示す、更には宝物という言葉さえも知らないおにの子に対するわにのおじいさんの驚嘆を示す、必要不可欠な言語表現であると考えからである。わにのおじいさんは、宝物という言葉に対して無反応のおにの子に、「驚いて、すっとんきょうな声を出し」ている。初出テキストの「なんだって？」と後述の「驚いて、すっとんきょうな声を出しました。」は、両者が呼応した上でわにのおじいさんの予想外の驚きを、密接に連動させながら読者に伝達する大きな効果を齎していると考えられる。

国語教室においてこの場面を取り上げる際、初出テキストと初刊本テキストとの比較考察を通して、宝物という言葉に対して無反応なおにの子に驚くわにのおじいさんの心情について、学習者と共に「深い学び」を実現する時間を設計することも一考ではなかろうか。

II. おにの子の帽子について

(1) 帽子を被ったおにの子

小学校国語教科書教材「わにのおじいさんのたからもの」では、おにの子が登場する場面を、次のように記している。5)

へびもかえるも、土の中にもぐりました。からすが、さむそうに鳴いています。

ある、天気の良い日に、ぼうしをかぶったおにの子は、川岸を歩いていて、みずぎわでねむっているわにに出会いました。

わにを見るのは生まれてはじめてなので、おにの子は、そばにしゃがんで、しげしげとながめました。

おにの子は、作品の冒頭から「ぼうしをかぶったおにの子」として登場している。中垣清人は、おにの子の帽子について、次のように述べている。6)

何気なく読んでいたら、最後の挿絵で、ぼうしをとったおにの子の頭に、にっさりつのが生えていた。ああそうだ、だからぼうしをかぶっていたんだとここで諒解。ぼうしは自分の宿命をかくし、差別から身を守るためのものだったのだ。 (中 略)

そう考えていくとなかなか意味深い表現がある。例えば、<むかし、ももたろうがおにかたかものをそっくりもって行ってしまってからというものは>というくだりは、この物語の世界では、おにというものがももたろうに登場するおにと同様に、悪事を働き、退治されるべきものと見られているということを示しているし、わにのおじいさんがおにの子を<まじまじ>と見て<わしのたからものをあげよう>と語るところは、そのような「おに」という固定化された見方でなく、心やさしき人間としておにの子の本質を見抜いたが故ということになるだろう。

ここで中垣は、「<むかし、ももたろうがおにかたかものをそっくりもって行ってしまっ

からというものは>というくだりは、この物語の世界では、おにというものがもたらろうに登場するおにと同様に、悪事を働き、退治されるべきものとして見られている」という宿命を、おにの子が背負っていると捉えている。世間一般の鬼に対する見方が、敵対的なものであるため、おにの子は常に帽子を被り自分自身の角を隠さなければ、外を歩くことさえままならない生活を強いられているのである。

(2) ひとりぼっちのおにの子

作者である川崎洋は、初刊本テキスト「ワニのおじいさんのたからもの」が収載されている『あかね創作童話 6 ぼうしをかぶったオニの子』の巻頭に付した「まえがき」において、おにの子の心情を次のように記している。7)

ぼく おにの子
 ぼうし かぶれば
 ふつうの 男の子
 ぼく ひとりぼっち

『あかね創作童話 6 ぼうしをかぶったオニの子』は、「かくれんぼとカカシ」「ワニのおじいさんのたからもの」「百さいのけむし」「ふしぎなでんわ」「タオルの海」の五つの作品によって構成されている。初刊本テキスト『あかね創作童話 6 ぼうしをかぶったオニの子』は、帽子を被ったおにの子が、道行く中でカカシ、ワニ、けむしをはじめ様々なものとの出会いと交流を描いた五つのストーリーとして編まれたものである。

『あかね創作童話 6 ぼうしをかぶったオニの子』における「まえがき」からは、悪事を働くおにという印象は全く感じられない。寧ろ、「ぼく ひとりぼっち」という言語表現からは、おにの子の心底に内在する孤独と寂しさを窺い知ることができよう。

高橋龍夫は、『あかね創作童話 6 ぼうしをかぶったオニの子』のまえがき部分について、次のように述べている。8)

鬼などの異形の存在が装身具などを身にまとして人間の姿と化し、人間界に介在してくる物語は民話などにしばしば見られるパターンである。その場合、人間界に対する遺恨や翻弄、あるいは教示など、人間側からの現実的な観点の枠に制限された関与として語られることが多い。そこには人間生活における神秘性の忌避、非道徳への教訓、秩序遵守への示唆など、人間の生活に役立つ語りとして、いかに生活するかという実質的な教化が背後に潜む。だが、『ぼうしをかぶったオニの子』では、最後の一行がそれと異質であることを明言している。

「ぼく ひとりぼっち」という呟きは、「ふつうの 男の子」として人間の世界に溶け込みたいという寂しさを抱えた存在者一個人の願いであり、そこには教訓性や道徳性とは距離をおいたひとりの男の子の物語の展開が標榜されている。かつて強さや悪の象徴であったつのは既に不要な物と化しており、つのは「ふつうの 男の子」になれない「ぼく」は「ひとりぼっち」にならざるを得ない。読者に同情的な眼差しさえ誘引するこの一行は、伝統的に語り伝えられてきた鬼の一般的なイメージの払拭を示唆すると同時に、後に述べるように強者と弱者、善玉と悪玉といった伝統的な既成の対立構造を溶解させる予感を内包している。

ここで高橋は、おにの子の「『ぼく ひとりぼっち』という呟きは、『ふつうの 男の子』として人間の世界に溶け込みたいという寂しさを抱えた存在者一個人の願いであり、そこには教訓性や道徳性とは距離をおいたひとりの男の子の物語の展開が標榜されている」と把握してい

るさらに、「つの為に『ふつうの 男の子』になれない『ぼく』は『ひとりぼっち』にならざるを得ない。読者に同情的な眼差しさえ誘引するこの一行は、伝統的に語り伝えられてきた鬼の一般的なイメージの払拭を示唆する」と主張している。

続いて臺野芳孝は、帽子を被ったおにの子について、次のように述べている。9)

この物語では「おにの子」になっている。「子」にすることで、災厄や邪悪さ、怖さがない。身近な感じさえする。さらに「ぼうし」をかぶっているのである。「おにのぼうし」にも「ぼうしをかぶったおにの子」が登場する。ぼうしをかぶるのは、おにであることを象徴する角を隠すのが第一義である。「おに」の寓意的概念の力・悪・恐怖を取り去ったあるいは弱めた存在である。人間の世界に紛れて、細々と生き延びている弱い存在という哀れささえ漂わせている。

臺野は、おにの子が「ぼうしをかぶるのは、おにであることを象徴する角を隠すのが第一義である。『おに』の寓意的概念の力・悪・恐怖を取り去ったあるいは弱めた存在である」とし、「人間の世界に紛れて、細々と生き延びている弱い存在という哀れささえ漂わせている」と読み取っている。おにの子にとって帽子は、人間社会が鬼に対し抱いている負の先入観を起因とした、謂われの無い迫害や攻撃から自分自身の身を守るために必要不可欠なものなのである。おにの子にとって帽子は、外出時における必携の品である。おにの子にとって帽子は、自分自身の頭の上の角を隠すことを目的として常に被るものであり、不用意に人前で帽子を脱いではいならないものであるということ、おにの子はこれまでの苦い経験から学習してきているのである。

III. おにの子の人物像について

(1) 好奇心旺盛なおにの子

小学校国語教科書教材「わにのおじいさんのたからもの」では、おにの子とわにのおじいさんとが出会う場面を、次のように記している。10)

ある天気の良い日に、ぼうしをかぶったおにの子は、川岸を歩いていて、みずぎわでねむっているわにに出会いました。

わにを見るのは生まれてはじめてなので、おにの子は、そばにしゃがんで、しげしげとながめました。

そうとう年をとって、はなのあたまからしっぽの先まで、しわしわくちゃくちゃです。人間でいえば、百三十才くらいのかんじ。

わには、ぜんぜんうごきません。

しんでいるのかもしれない——

と、おにの子は思いました。

「わにのおじいさん。」

とよんでみました。

わには、目をつぶり、じっとしたまま。

あ、おじいさんでなくて、おばあさんなのかもしれない——
と思いました。

「わにのおばあさん。」

やっぱり、わにはびくりともうごきません。

しんだんだ——と、おにの子は思いました。

おにの子は、そのあたりの野山を歩いて、地面におちている、ほおの木の大きな葉っぱをひろっては、わにのところにはこび、体のまわりにつみ上げていきました。

朝だったのが昼になり、やがて夕方近くなって、わにの体は、半分ほど、ほおの木の葉っぱでうまりました。

加藤憲一は、おにの子の人物像について、次のように述べている。11)

<わにを見るのは生まれてはじめてなので、おにの子は、そばにしゃがんで、しげしげとながめ>る。ここでも<おにの子>の人物像が読者にはっきりと浮き上がる。<生まれてはじめて>という理由づけ、<しゃがんで><しげしげと><ながめる>という<おにの子>の行動、その様子、表現から、世間をあまり知らない、幼く好奇心の強い<おにの子>像を実感的にイメージできる。

ここで加藤は、わにと出会ったおにの子の「<生まれてはじめて>という理由づけ、<しゃがんで><しげしげと><ながめる>という<おにの子>の行動、その様子、表現から、世間をあまり知らない、幼く好奇心の強い<おにの子>像を実感的にイメージできる」と指摘している。

おにの子は、生まれて初めて見るワニの傍らにしゃがんで繁々と眺めたり、身動き一つしないわにに対して「わにのおじいさん」「わにのおばあさん」と問い掛けてみたりしている。おにの子は、初めて出会ったわにに対して、興味を抱き観察するような好奇心旺盛な人物であると言える。

(2) 慈悲あるおにの子

原田恵美子は、おにの子が、わにの体の周りに朴の木の葉を積み上げる行為について、次のように述べている。12)

わにが死んでいるのかもしれないと思って、ほおの木の大きな葉っぱを、体の周りに積み上げていきます。それも<朝だったのが昼になり、やがて夕方近くなって>というほど、ずっと休まずかけてあげています。初めて会ったわけですし、自分と関係のない人なのでから、そこまでしなくてもいいのに、おにの子は一生懸命です。わにのおじいさんが「ああ、いい気もちだ。」と目を覚ますほどですから、気持ちがいいようにかけてやったのだということがわかります。いいかげんにするのではなく、相手のことを考えて行動しています。

原田は、おにの子の行為について「わにのおじいさんが『ああ、いい気もちだ。』と目を覚ますほどですから、気持ちがいいようにかけてやったのだということがわかります。いいかげんにするのではなく、相手のことを考えて行動してい」と把握している。

おにの子が、身動き一つせず横たわるわにを前にして、こうした慈悲ある行動を起こしたのは、おにの子の中に他者を労る思いやりの心が宿っているからであろう。川岸を歩いていたおにの子が、水際で横たわり微動だにしないわにを見つけ、縁もゆかりも無いにも拘わらず、慈しみと誠意を持って力を尽くしている点に留意したい。

(3) 思いやりと強い意志のあるおにの子

加藤憲一は、朴の木の葉を積み上げるおにの子の描写について、次のように述べている。13)

そして、〈死〉と判断した時点で、〈おにの子〉は、ここでも死者を葬るという新たな行動に出る。〈おにの子は、そのあたりの野山を歩いて、地面におちてる、ほおの木の大きなはっぱをひろっては、わにのところにはこび、体のまわりにつみ上げて〉いく。〈体のまわりにおいていく〉でも〈つんでいく〉でもない。〈つみ上げる〉のである。読者にまざまざとその様子がイメージでき、そこに、行動者としての〈おにの子〉の意思と思いと死生観さえうかがうことができる。その行動は、〈朝だったのが昼になり、やがて夕方ちかく〉まで続き、〈わにの体は、半分ほど、ほおのはっぱでうま〉る。小さな〈おにの子〉が、葉の広いほおの木の葉で〈つみ上げる〉とはいえ、大きな〈わに〉の体のまわりにつみ上げていくのであるから、夕方までかかってもまだ、半分なのである。身も知らない人物へのこの献身を異化し対象化することで、〈おにの子〉の他者認識と生命観が浮き上がる。

〈ひろって〉ではなく、〈ひろっては〉運ぶのである。〈は〉という助詞の有無のちがいに気づかせたい。幾度も幾度も終日この行動を繰り返していることを、この〈は〉によって、実感したとき、子ども達は驚くだろう。そして、なぜ、かくもの時間と労力を要して、見も知らぬ他者の死に関わるのかという問いをもつだろう。なぜかを子ども達に問いたい。小さく、世間のことは知らない〈おにの子〉であるが、命というものの重みを認識しているからこそ、死者を丁寧に葬ろうとする行為になったのではないか。しかも寒い冬という状況の条件とも関連させて〈おにの子〉のこの行為を子ども達が主体的に意味づけた時、〈おにの子〉の限りないやさしさと愛の本質を見ることができるだろう。この〈は〉という助詞ひとつの中にも人物のものの見方・考え方が描かれているのである。

ここで加藤は、「つみ上げていきました」という言語表現に着目し、そこにおにの子の思いが窺えると考えている。おにの子は、「野山を歩いて、地面におちてる、ほおの木の大きなはっぱをひろっては、わにのところにはこび、体のまわりにつみ上げて〉いく。〈体のまわりにおいていく〉でも〈つんでいく〉でもない。〈つみ上げる〉のである。」と指摘する。更に加藤は、「〈ひろって〉ではなく、〈ひろっては〉運ぶのである。〈は〉という助詞の有無のちがいに気づかせたい。幾度も幾度も終日この行動を繰り返していることを、この〈は〉によって、実感したとき、子ども達は驚くだろう。」とし、おにの子の行動が終日連続して繰り返されていることを明らかにしている。

おにの子は、川岸の水際で横たわるわにに呼び掛けても身動き一つしないのを確認し、「しんだんだ」と勘違いする。そして野山を歩いて、地面に落ちている朴の木の大きな葉っぱを拾ってはわにの所に運び、わにの体の周りに積み上げていくのである。おにの子は、この行動を「朝だったのが昼になり、やがて夕方近く」になるまで、何度も往復しながら繰り返すのである。

恐らくおにの子は、わにの体とほおの木の大きな葉っぱの間に隙間が生じないように注意を払いながら、丹念にそして慎重に朴の木の葉っぱを「積み上げてい」ったのであろう。季節は、冒頭に「へびもかえるも、土の中にもぐりました。からすが、さむそうに鳴いています。」とあるように、晩秋から初冬であろうか。この時期に、野山を歩き回りながら、地面に落ちている朴の木の大きな葉っぱを拾っては運び、わにの体の周りに積み上げていく行為は、体の小さなおにの子にとって、決して容易なことではなかったと考える。しかもおにの子は、今日初めて出会ったわにのために、その行為を幾度となく繰り返すのである。こうして見ると、おにの子は、他者に対する思いやりと優しさを兼ね備えた人物であると考えられる。

おにの子は、朝から夕方まで丸一日、休むこと無く、只管朴の木の大きな葉っぱを運んではわにの体の周りに積み上げている。容易でない、尚且つ同じ行為を幾度と無く反復するには、相当の根気が必要である。いくら自らが行くと決めたこととはいえ、野山から川岸までの間、朴の木の大きな葉っぱを終日何往復も運び続けることは、かなりの重労働である。そしておにの子は、こうした行為を途中で投げ出さず、しっかりと最後までやり遂げようとしている。おにの子は、強い意志と粘り強い根気を持ち合わせている人物であるとも言えよう。

(4) 見識のあるおにの子

小学校国語教科書教材「わにのおじいさんのたからもの」では、おにの子とわにのおじいさんとの会話の場面を、次のように記している。14)

朝だったのが昼になり、やがて夕方近くなって、わにの体は、半分ほど、ほおの木のはっぱでうまりました。すると、

「ああ、いい気もちだ。」

と、わには、つぶやきながら目をあけたのです。

「きみかい、はっぱをこんなにたくさんかけてくれたのは。」

「ぼくは、あなたがじっとしてうごかないから、しんでおいでかと思ったのです。」

「遠いところから、長い長いたびをしてきたものだから、すっかりつかれてしまってね。もう、ここまでくれば安心だと思ったら、きゅうにねむくなってしまってさ。ずいぶん何時間もねむったらしいな。ゆめを九つも見たんだから。」

そう言うと、わには、むああっと長い口をいっぱいにあけて、あくびをしました。

西郷竹彦は、おにの子とわにのおじいさんとの会話について、次のように述べている。15)

<「きみかい、はっぱをこんなにたくさんかけてくれたのは。」「ぼくは、あなたがじっとしてうごかないから、しんでおいでかと思ったのです。」><しんでおいでかと思った。>ちゃんと敬語が使えるというのは、近ごろの教師にもあまりないことですが、このおにの子は、文化的かつ「教養」のあるおにの子です。こういう人柄というのは大事なところですよ。

ここで西郷は、作品に登場するおにの子が「文化的かつ『教養』のある」人物であると評している。「教養」のある人物とは、相手や状況に応じた言葉遣いや対応が取れる人のことであり、相手の気持ちに立脚したものの見方や考え方が身に付いている人のことであろう。

おにの子は、わにのおじいさんの「きみかい、はっぱをこんなにたくさんかけてくれたのは。」という問いかけに対して、初めての会話ながらも「ぼくは、あなたがじっとしてうごかないから、しんでおいでかと思ったのです。」と敬語表現で返答している。おにの子のこうした年輩者に対する言葉遣いや振る舞いは、他者への礼節と敬意だけに止まらず、他者との人間関係を円滑に結ぶ上で重要な要素の一つでもあろう。

わにのおじいさんとの会話を通したおにの子の敬語表現からは、相手を尊重でき、相手を大切に慮ることができる見識を具備したおにの子の姿を垣間見ることができる。おにの子と初対面で会話をしているわにのおじいさんには、おにの子の見識と人柄がよく伝わっていたと考えられる。わにのおじいさんは、おにの子との会話を通して、おにの子への信頼感と安心感を徐々に増幅させていったのではないかと考える。

【引用文献】

- 1) 「ワニのおじいさんの宝物」、『婦人之友』、婦人之友社、1976年2月1日、88頁
- 2) 「ワニのおじいさんのたからもの」、『あかね創作童話6 ぼうしをかぶったオニの子』、あかね書房、1979年7月31日、17～18頁
- 3) 前掲1)の文献、89頁
- 4) 前掲2)の文献、20頁
- 5) 『国語二下』、教育出版株式会社、2000年1月、34頁
- 6) 中垣清人稿「わにのおじいさんのたからもの(川崎洋)」、「国語の手帳」27号、明治図書出版株式会社、1990年1月1日、65頁
- 7) 前掲2)の文献、1頁
- 8) 高橋龍夫稿「<感性の時代>の物語—川崎洋の詩的世界—」、田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 小学校編2年』、教育出版株式会社、2001年3月16日、123～124頁
- 9) 臺野芳孝稿「物語『わにのおじいさんのたから物』(川崎洋)」、『国語科小学校・中学校新教材の徹底研究と授業づくり』、学文社、2005年8月31日、32頁
- 10) 前掲5)の文献、34～35頁
- 11) 加藤憲一稿「ものの価値と人間認識に迫る—美的体験を通して—」、田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 小学校編2年』、教育出版株式会社、2001年3月16日、142頁
- 12) 原田恵美子稿「『わにのおじいさんのたからもの』の授業 川崎洋作」、『新版 文芸の授業・小学校2年』、明治図書出版株式会社、1997年4月、90～91頁
- 13) 前掲11)の文献、146頁
- 14) 前掲5)の文献、36～37頁
- 15) 西郷竹彦著『西郷竹彦全集 文芸・教育 第八巻 文芸の世界Ⅱ 童話・物語』、恒文社、1996年9月10日、209～210頁